

連載
第45回

福聚山史

池浦 泰憲 文
及川 一晋 編

「慈眼」の人、

石原忍博士

常円寺では、毎年「一新会」という会が施主の法要を勤めている。

一新会とは、眼科医であった石原忍氏をかこむ東京大学眼科同窓会の名称に由来する会であり、氏の業績を受け継ぎ、眼科学の振興を目的とした活動を行う会（財団法人）である。

○軍医として

明治十一年（一八七九）、東京麹町区永田町で生まれた石原忍は、明治三四年（一九〇二）に東京帝国大学医科に入学する。明治三八年（一九〇五）年に卒業後、軍医となった。軍医とは、軍隊構成員である医師のことで、森岡外などがある。その時の第一志望は外科、第二志望が眼科であったというが、当時陸軍には眼科医がおらず、石原はここで徴兵検査に必要な視力や色覚について開拓的な研究にとりこんだ。



法名の「慈眼」とは、『観音経』「慈眼を以て衆生を視る」の経文からとった語である。

○色盲検査表の発明

石原は、明治四五年（一九一二）年から約二年間、ドイツのイエナ、フライブルグ、ミュンヘン大に留学した。その後、軍医学校の教官をしながら、大正五年（一九一六）医学博士の学位を授与された。この時期に、その研究成果を約三十の論文にまとめている。のちに石原は「自分の学術的成果はこの数年間に出来た」と回顧しているが、その中でも石原の名を高らしめたのは色覚異常（色盲）の研究で、大正三年（一九一四）陸軍省から徴兵検査用に「色覚異常検査表」が依頼された。当時使用されていたのは、「スチルリング表」とよばれているものであったが、日頃からその結果のあやふやさに疑問を抱いていた石原は、この表を参考に、健常者と色覚異常者が同じ表からそれぞれ違う字を読み取れるものになるように出来るものを工夫し、勤務の合間の日曜ごとに自ら鉛筆を握って第一、二、三表と完成させていったという。印刷された検査表は徴兵検査に使われたが、この表は、我々が今現在、誰もが受けたことのあるあの色盲検査表である。この「万国色盲検査図」は、世界各国の多くの人々の色盲検査にも使われているという。

○東京帝国大学教授として

大正十一年（一九二二）、石原は、東京帝国大学医科の眼科学教室の主任教授に選ばれた。この時の就任の言葉は「大学の使命は研究である。アルバイトをしない教室は大学の名をはずかしめるものである。日常患者の診療も研究態度をもってせねばならぬ。」であった。ここで

いう「アルバイト」とは、ドイツ語で労作、業績研究論文の意味である。石原には「日本の医学はまだ幼稚な段階にあるから、もっと勉強しなければならぬ。そのためには研究の設備を充実して、大いに業績をあげなければならない。」との思いがあった。そこで直ちに暗室、研究室、図書室の大改革を行い、公私の区別を明らかにし、合理的な方法を持ち込んだ。そして、毎日朝から夜遅くまで教授室にとどまり研究を続けた石原の姿は、それまで自由で規律の乏しかった医局の空気を一変させたという。

大正十二年（一九二三）就任から一年半後、

石原は関東大震災を体験する。本郷の火事が眼科学教室にも近づいてきた中、図書や顕微鏡を運んで避難させたり、患者や職員の食糧確保などに尽力した。地震の大混乱の中、軍隊生活で学び、身につけた組織生活や、鍛えられた精神力と行動力をもってフルに働いたという。

○戦時下と眼科研究

石原の持論の一つに日本人の眼は西洋人の眼よりすぐれているとするものがある。日本人の目の色や眼瞼^{まぶた}の特徴が、西洋人と違うことを医学的に説明し、日本人の目の特徴である黒い色の目が眼球を包んで余計な光をさえぎる点、また、日本人に多くみられる一重瞼が眼球の保護、保温から優れている点から西洋人の眼よりもすぐれていると主張する。この学問的な持論は、特に後者においては、やや国粹的な考えと結びついて、「西洋かぶれ」でせつかくの一重瞼を手術によって二重にするなどというのは「愚の骨頂」というほどであったが、これらをまとめ、戦時中の昭和十七年（一九四二）に出版された『日本人の眼』の冒頭で石原は、「今や大東亜戦争の真つ最中であり、国を挙げて最も強健なる人的資源を必要とするの時、本書がいくぶんでも眼の保健に役立って国家にご奉公が出来れば、

それこそ私の最も欣幸とするところである」とのべているが、その内容はともかく、当時の日本の状況下で、いかに自らの研究を位置づけていくかという課題に向き合っていたかが伺える。

○「伊豆の村医」へ

昭和二十年（一九四五）八月に終戦を迎えると、翌二十一年四月、石原は二年前から就いていた前橋医学専門学校校長を辞し、伊豆の河津に移った。この地は東京帝国大学の医局時代に買った別荘「一新荘」の建つ地で、そこに移り住み、六月には「河津眼科医局」を開業する。冒頭で紹介した「一新会」の名はこの建物に由来するのである。

石原のモットーは「患者に接する時は、常に自らを病氣となりたる場合を思い、患者に同情して親切に取り扱い、自然に反せず力を尽し、ひたすら病苦を軽減せんことを心掛くべし」であった。河津での日々は、診療時間の制限なく来るものはすべて拒まず患者の苦痛を和らげ、病気を治すことだけに全力を注いだという。さらに石原は、村の若者に本を読ませようと、東京の自宅を売って元の村役場を買い取り、私設図書館をつくった。また、共同風呂に温泉をひき、村道を直すなど、地域の文化と生活の向上にも私財をなげうって寄与したのである。

○「慈眼」の人

昭和三十八年（一九六三）一月三日、石原は八三歳にて没する。晩年は、眼科研究とともに日本人に近視眼者がいかに多いかを実感したという個人の経験から、長く研究を続けてきた「新国字」構想をまとめ、「石原式新力ナ文字」を開発することもできた。こうして眼科医という立場からさまざまなものを文字通り自らの「眼」を以てみてきた石原には「慈眼院殿啓心日忍大居士」の法名が授与され、その遺骨は常円寺に埋葬された。